

## 何が変わる？

### 地上デジタル放送

地上デジタル放送推進協会(D-PA)  
理事長  
(全国地上デジタル放送推進協議会 会長、  
㈱テレビ新潟放送網 代表取締役会長)



きたがわ まこと  
北川 信

D-PA (ディーパ)と呼んでおりますが、地上デジタル放送推進協会と言います。事務所は東京の青山1丁目にありますが、この9月1日にスタートいたしましたピカピカの1年生で、まだ職員同士も顔はやっと覚えただけれど名前がはっきり覚えられないというレベルの仕事の始め方であります。

一言、どんな仕事をしているかと言いますと、デジタル放送といいましても、私もアナログ上がりでありますので、デジタルのことは分からないことがたくさんございます。デジタル放送のテレビ受信機というのは、パソコンのかたまりみたいなもので、かなりレベルの高いコンピュータ機能を持っておりますから、これが不具合になると町の電気屋さんには負えません。そこで、メーカーは、すでに作る段階から、受信機みずからを制御できるようなプログラムを埋め込んであります。従って、放送波を使って新しいデータやプログラムを流し込むことによって、それぞれの家庭の何百万台という受信機を一括して制御するといえますか、調整をやってしまうわけです。そういうコントロールのことをエンジニアリングサービスと言っておりますが、そのエンジニアリングサービスをやるだけでも、各メーカーさんの意向を聞いてプログラムをセットして、それを編成して、当面はNHKの放送波の一部を提供してもらい、全国に流すという計画で準備をしております。

私は日本テレビで50年ほど放送の仕事をしていたわけですが、アナログ放送のころは番組を作って流しさえすれば、

言い方が悪いかもしれませんが、勝手に皆さんが見てくださいました。ところが、デジタル放送というのは、受信機制御まできちんとやらないと、画像が映らなくなってしまうというのですから、これはだいたいやこしい世界だなという感じがひしひしとしているわけでありまして。

もうひとつやこしい話がありまして、ご承知のとおり、ハイビジョン、HD番組が飛躍的に増えます。プラズマで見ると驚くほど美しい画面が出るわけですが、これがあまりにも精密にできているので、ホームビデオで録画しても、画質にほとんど劣化がありません。そうすると、今は音楽関係でずいぶん問題になっておりますが、インターネット等でいわゆるテレビ番組の海賊版がどんどん流れています。私もそのへんが認識不足だったのですが、「北川さん、あんた、HDのドラマを一つ作って放送したら、明るく日には、全世界、ヨーロッパからアメリカまで、そのコピーがヤミ販売されることを覚悟しなきゃ駄目だよ」と言われて、「それじゃ、なるべくきれいじゃない画像を流せばいいんだ」と冗談を言っていたんですが、これでは何のためのデジタル化か分からなくなってしまいます。ではどうすればいいかということで、メーカーの技術の方などと相談をしまして、結局、1回しかコピーができないような信号を出そうということになりました。これを「コピーワンス」と言っています。そういう技術的な仕掛けをつくって、2回以上コピーをとれないような機械にしようというわけです。ただ、この世界ですから、本気になって破ろうとすれば、また、それを破れるような裏技も出てくるだろうとは思いますが、放送側もその先回りをして、暗号をどんどん変えていきます。暗号解読ゲームみたいな、太平洋戦争みたいなことになってくるわけでありまして。これは番組を守る、その根っこにある著作権を保護する仕掛けでございます。今、私どもの間では「RMP」と呼んでおります。これも最初にご紹介しましたD-PAが管理をしていくことが決まっております。私は、テレビの仕事というのは番組を作ったり、だいたい楽しいことの多い商売だと思っていたのですが、最近、技術の話がやたらと多くなって理科系の皆さんとお付き合いをしなければ一歩も先に進めない、なかなか難しい時代が来たものだと思っております。

今申し上げた業務は言うなれば受信機側のインフラといえますか、規格管理といえますか、基盤をつくり維持する事業であります。鉄道で言えば線路の保線作業員かなと思いますが、それがないと電車が走らないという意味では、大事な仕事だろうと思います。

いよいよ12月1日から、東名阪の広域地区だけでありますが、地上デジタル放送が開始されます。この日本の地上テレビのデジタル化は大変特徴があります。それは新設、新しく始めるのではなく移行、旧来の放送を移し替えていくということです。アナログからサイマルを通してデジタルになる。現在、テレビ局の持っている免許は、アナログ周波数の免許1つです。デジタル放送のスタートと同時にアナログの免許とデジタルの免許と2つの周波数をもらって放送します。それがサイマル放送ですが、サイマル期間を過ぎて2011年になると、電波法にも織り込まれていますが、アナログを停波しなければなりません。「サイマル」という言葉は「同時」という意味で、サイマル放送とはアナログ放送とデジタル放送を同時に行うことです。今回の免許でも文字どおり、同じ番組を一日60パーセント以上両方のチャンネルで放送することが義務付けられているのです。

このように、最初はアナログ1チャンネル、次にアナログ、デジタル2チャンネルになり、アナログを停波することによってデジタル1チャンネルだけになります。これを完全移行と呼んでおりますが、今までニューメディアでは初めてのことでございます。ですから、地上のデジタル放送というのは実はニューメディアではないわけです。すなわち、長期的に見るとモアサービスではないということをして、新たにサービスが増えることはもちろん大事ですが、それ以上に従来のサービスを確実に伝えていく、継承していくことが非常に重要だと私は思っています。

よく「デジタルになると、どう変わるんですか」と聞かれます。「いや、何も変わりません。ニュースはニュース、野球は野球ですよ」と言っています。「そんなわけないでしょう」と言われますから、「あなた、デジカメを持っているでしょう。デジカメと以前の光学系のカメラと違いますか?」「それはいろいろ違いますよ」「では、おたくの奥さんをデジタル

で写したら、アナログより美人になりますか?」「いや、それは変わりませんよ。かみさんはかみさんですよ」とおっしゃいます。

まあ、これは笑い話ですが、テレビの番組の中身はそういうものだと思います。基本的に、今、地上放送は基幹メディアとして人気を博しているというか、おかげさまで多くの支持を得ておりますが、その原因はあくまで番組の中身の信頼性と楽しさにあります。デジタル化によってたしかに変わりますが、本当に大事なことは、今、アナログ時代にも果たしている基幹メディアとしての役割を、きちんとデジタル時代にも拡大しつつ維持し続けることです。その本質をわきまえないと、何か新しいものへ飛びつければ視聴者が増えるとか、収入が増えるとかというように考えたのでは、間違えてしまうのではないかと考えております。

本質論的には、デジタルになっても何も変わらないよと言っていますが、それでは本当に何も変わらないかということ、そうとも言えません。私の考えでは、いちばん最初に、視聴者の方から見て、デジタル放送になったら変わったなと思う点は、たぶん端末の多様化だろうと思います。

まず、皆さんよくご存じのとおり、去年あたりからブームになっていますが、プラズマと液晶の大型画面です。このディスプレイが開発されたことで、テレビの世界というのはものすごく楽しくなりました。これからホームシアターを目指してどんどん番組が開発されるだろうと思いますし、ご承知のとおり、地上波というのはビッグイベントが大好きですから、オリンピックだろうが、ワールドカップだろうが、何でもでっかい話があればすぐ飛んで行って中継してしまう。戦争でも中継しちゃうというようなところですから、大型スクリーン向きだろうと思います。

その反対に、非常に小さな画面もあります。デジタル放送になると、携帯電話に地上放送のチューナーを内蔵することが当たり前になるかと思えます。これは非常に期待しているのですが、簡易動画サービスと言いまして、新たに開発された信号圧縮技術によって携帯電話でテレビが見られるようになるというものです。端末などの準備に時間がかかっていますので、まだ街では話題になっておりませんが、

もう1、2年すると、デビューすると思います。実際にご覧になると分かりますが、高画質の威力は大画面はもちろん、小画面でもよく発揮されます。ロングショットの多い野球中継が十分楽しめるわけです。今まででも、車に乗っていてテレビを見るということはいくらでもできたわけですが、皆さんがポケットに入れられるテレビというのは初めてだろうと思うのです。特に期待していますのは、昼休みのOLとか、アフターファイブのビジネスマンとか、彼女たちや彼らがこれまで絶対テレビを見る習慣のなかった時間に、携帯電話を使ってちょっとおしゃべりな情報を手にする。あるいは、気になっている野球チームの試合ぶりを中継番組で眺める。それによってこれまで固定テレビ時代には固定していた視聴者層が変わっていくだろう、新しく増やせるだろうということです。

ご承知のとおり、テレビのデジタル化というのは、アナログ時代に蓄積した利益を注ぎ込んでデジタルの設備投資をやるということです。蓄積した利益以上に設備投資をやるとすってんてんになって、デジタル化はできたけれど会社はつぶれたということになりますので、今、放送事業者は必死になって経営を引き締めてやっています。しかし経営努力には限度がありますので、例えば、2011年までに、完全にカバレッジがカバーできない場合は、何らかの支援をいただいてスピードを上げなければならないという問題があります。この点、本日ここにいらっしゃる皆様にも、ぜひご理解いただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

話は脇道にそれましたが、そういう簡易動画サービスもそうですが、今、ノートパソコンを買いますと、ほとんどテレビチューナーが付いています。それから、音楽関係は、非常に圧縮技術が進んで、いろいろなファイルが開発されています。パソコンというのが、今まではビジネスマシンとされてきたわけですが、一部は、完全にオーディオビデオのレシーバー、プレーヤーとしての役割を果たしつつあります。むしろそっちのほうが楽しみ方の主役になってきているというこ

とがあります。ですから、地上デジタル放送がうまくスタートしますと、まず、ほとんどのパソコンが地上デジタルテレビのチューナーを内蔵するようになるだろうと思われます。ひょいと持って風呂場に行って、お湯に浸かりながらテレビが見られるとか、キッチンへ持って来て一杯飲みながら見られるとか、家庭内部での携帯性など、いろいろなTPOが開発されるということがあります。

それから、よく言われます双方向です。双方向のサービスが本当に実ってくるためには、それぞれの受信者が電話線なりブロードバンドなり、上り回線を確保して、かなり積極的な視聴でテレビを使ったださらないと、なかなか面白味が出てまいりませんので、一般的にはたいぶ先の話になるのではないかと思います。アナログテレビ時代でも需要の多いテレショップであるとか、高齢化の家庭に向けた限定放送も可能になってくるのではないのでしょうか。つまり、放送局から特定の視聴者にメールを送るということも、デジタル放送になるとできるわけで、その発展型として、画面に映った夜の食事のメニューを視聴者のほうから放送局に発注して、放送局が取り次いでケータリング業者が燻井を届けるというような事業の開発も可能になるだろうと、いろいろ夢が広がってきます。

今、申し上げたのはほんの一局面ですが、まず、受信機が多様化するということでテレビも変わり、世の中も変わるということです。そのとき、番組だけが変わらなかつたら相当惨めなことになるだろうと思いますので、われわれ、放送事業者は、TPOも増えるし、視聴者の新しい層も開発できるというところに狙いをつけて、より多様で、より豊かな番組作りをやらなければいけません。これは当然のこととして頑張っております。

いよいよ12月が近づきつつあります。地上デジタル放送の開始です。その節はぜひ強いご支持とご叱声をお願いしたいと思います。

(9月10日 第323回ITUクラブ例会より)